

# 心に響く

## 出会いを求めて

京 都 荒井まき子

自然の風景・人・物・街角等出会いから生れた感動に心を揺さぶられ、突き動かされてスケッチブックを開く。

作品の出来不出来に関係なく、制作している時は時間を忘れるひとときでもある。

この為、制作について原稿の依頼を受けたものの、正直なところ、特別理念を掲げて制作していたとも思えない。

改めて振り返って見ても、唯心に響く



▲ 八坂の塔 F6号

対象との出会いを大切に、発想を膨らませ、線と調子、そして色によって思いの丈をぶっつける。そのプロセスで、あ、も、こうもして見たいと画面の上で遊ぶ事から、内在する思いが無意識に表現され、そして好むと好まざるにと拘わらず、自己表現された作品がそこに生きた証として残される。自己の存在を手探りするこの作業を、飽きもせず、半世紀近くも続けて来た事に我ながら驚いている。

その間、追い求めている「何か」を、その都度表現しきれずに、常に悩み続けた残骸が、現在もアトリエに山と積まれている。「芸術とは、悩める魂の所産である」とは誰の言葉だっただろうか。

これまで国内外の街角をモチーフにしてきたが、そこには住んでいる人々、或は立ち寄った旅人の、様々な人生模様が続り広げられている。同じ街角でも、心



▲ 三年坂 (産寧坂)

のあり様で街は表情を変える。朝と昼、そして旅情を掻き立てる暮れ泥む街、夫れ夫れに違った魅力ある顔を見せてくれる。

気がついたら、スケッチの手を止めて眺めている事が多い。

今までも、これからも潇洒な絵を描く積りはない。むしろ土俗的で普段着での会話が聞こえる様な、そんな街の雰囲気や生活感、煮炊きの匂い迄も感じられるそんな表現が出来ないものかと、その都度思い悩むが道程は遠い。

その点、幼児は上手に描こうと云う意識もなく、導入で気持が高揚してくると、周りの状況等眼中になく、思いの儘に表現する。つぶやきながら想像を膨らませ展開させてゆく。解き放たれた自由な心

の儘に、その子自身が次々画面に顔を出してくる。ミロやピカソも、自由な心で制作していると思っていたが、或る時、「本来あるべき幼児の様な純粹で自由な心で表現出来たら…」と何かの本に書いていたのを讀んだ記憶がある。

幼稚園、保育園の表現教育に係って四十年、身近に素晴らしいお手本や、自由な心の表現者がいるにも拘わらず、人間を永くやっている、常識や概念に翻弄され、プロセスで心を遊ばせ、自由に描いていた積りが、出来上った作品は不自由になっている。

心の儘に、主体と客体の錯綜する画面に、込められた想いが色や形に夫々の意味合いを担って躍動している、そんな作品に憧れるが、現実には夢のまた夢であ



▲ 祇園 (白川たつみ橋)



▲ 祇園たつみ橋

る。

ところで、写生地やモチーフについて少し触れておきたい。

京都の地形は南北に長く、北は日本海に面した風光明媚な日本三景の一つ、天ノ橋立や、伊根町の舟屋等、数多くの漁村も点在し題材は多い。

又、世界遺産として登録された神社仏閣は、最多の十七を数える。悠久の時を今に伝えるそれ等の文化財も多く、モチーフに京都ならではの風情を添える。

最近では、京都市街地で取材をすることが多い。山公園から清水寺へ続く坂道は、みやげ物店や、工芸の店が立ち並び、京情緒たっぷりの佇みである。石塀小路、二年坂へと続き、階段を登り切ったところで交わるなだらかな風情ある石畳を下ると、足利義教によって再興されたと云

う法観寺の八坂の塔へと続く。更に登って行くと三年坂（産寧坂）に至る。

祇園界限（重要伝統的建物群保存地区）は、古い格子戸の老舗の料理屋や、置き屋が軒を並べ、その佇みは花街の風情を今に伝えている。

この辺りでスケッチをしていると、お稽古の行き帰りや、お座敷へ向かう舞妓さん、芸者さんによく出会う。時々立話をしていて、普段着の舞妓さんは、髪型こそ違い、巷の女の子と何ら変わらない会話や雰囲気、何故かホッとさせられた。

こうした市街地には、千二百年の伝統や、文化に育まれた風情ある古都の町並が広がっていて、題材には事欠かない。

▼ 祇園たつみ橋での立話

